

小児看護

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

3

Vol.46 No.3 MARCH

2023

子ども・家族と目指す 痛みの緩和



連載

離島で釣りして、看護して
みんな健康でいたい

学んで驚く！子どもの応急手当
子どもには人工呼吸が必須！
子どもの心肺蘇生法



佐藤聡美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第22回 校長先生の春惜月

モノトーンの世界に、梅の本紅色が差し始める時季。円くて小さいつぼみが、季節はめぐっていることを思い出させてくれる。やさしい陽だまりのなかに、冷えるひと吹きの風が、人との別れを予感させる。

私は最終の学年になるとそわそわした。この次に上がる学年が無いということに、不安と疑念の混ざった気持ちがあった。卒業式に至っては、本当に明日からこの人たちと会うことはないのだろうか、と不思議な感覚に陥っていた。悲しい、とか、寂しい、などというような感傷的な気持ちではなく、どういうわけか、少し疑うような感覚に近かった。

小学校4年生くらいのとき、新しい校長先生がやってきた。校長先生という人に興味をもったことのない私には、何の関係もない出来事だった。せいぜい、おじさんとおじいちゃんのあいだのような先生がくるのだろう、と思ったぐらいだった。しかし、その先生は着任の挨拶で強烈な印象を残した。なんと話が短いのである。

「自分が校長だ、よろしく」である。

校長先生の話を聞くというのは、我慢大会の別名だと暗に学んでいた私たちにとって、驚くべき事件だった。校長先生の話が長いというのは、校則ぐらい普遍的な事項だと思っていたからだ。始業式も終業式も、

入学式も卒業式も。大事なことを3分だけ話したら、「校長先生の話は以上です。おしまい」と言ってスタスタと壇上から降りていった。

それから様変わりした。校長先生の話が短いものだから、ほかの先生がそれより長く話せない。長く話そうものなら、要点をまとめられない先生だな、と浮いてしまい、白けられるのがオチである。得てして、体育館で校長先生の話聞くために廊下に出て並ぶといううんざりとした雰囲気も、早く終わって帰ってこようぜ、に変わった。校長先生の話が短い、というだけで、「この人は私たちの気持ちがわかっている」と児童たちはひそかに感心した。

そして、この校長先生。見た目の豪快さとは裏腹に、毎日、ひたすら学校の廊下を歩いては、ただ黙ってゴミ拾いをしていたのである。傘立てが壊れていれば修理をしたり、ゴミ箱がずれていれば元に戻しておいたり。今思えば、担任もおちおち気が抜けなかったろう。ゴミ拾いとはいえ、廊下にいる校長先生に授業が丸聞こえなのだから。

そして、卒業式。やはり、短い挨拶だった。「頑張れ」ということだった。惜別の情がじんわりとわいた。梅から桜に移り変わる頃だった。

佐藤聡美

さとう・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士、公認心理師。NPO法人エゴノクラブ理事長。富山県出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。令和4年度大谷賞(日本小児血液・がん学会賞)受賞。